

論文審査の結果の要旨

令和2年 7月 30日

申請者： 王 晶

論文題目： 佐多稲子論—社会的弱者表象の展開

王晶博士論文「佐多稲子論—社会的弱者表象の展開」は、戦前のプロレタリア文学運動隆盛期から戦後の高度経済成長期に至る佐多稲子の多様な文学作品を「社会的弱者表象」というテーマで読み解いたものである。王は「キャラメル工場から」（1928年）に代表される家父長制に抑圧された女性労働者を描いた初期作品、プロレタリア文学運動の弾圧により通俗的傾向が強まった「女三人」（1940年）、そして戦時下における外地を描いた「旅情」（1941年）や「髪の嘆き」（1943年）、さらには戦後復興期である1950年代前半に経済的な成功を追い求める老人を描いた「黄色い煙」（1953年）など、佐多の初期・中期・後期における12の作品を解説し、日本の政治・社会状況の大きな変化の中で佐多文学の核心にある動機と思想を析出することを試みている。

各作品の読解を通して本論文は、佐多が労働者階級の人々の抑圧された生活を描くプロレタリア作家として出発し、戦時下の思想的弾圧においては時世に迎合しつつも体制内批判者として生き延び、戦後においては民主主義の理想に活路を見いだすなど、批判的視点を維持した柔軟なリアリストであることを主張している。そして政治的な紆余曲折を経た佐多の文学に一貫して存在するのが市民感覚に裏打ちされた社会的な弱者への共感であると結論付けた。

本論文の序章と第一章の内容の一部は、既に「少女労働者の抵抗—佐多稲子の『キャラメル工場から』と『水』」（『昭和後期女性文学論』p159-171）として本に収められており、ここで王は膨大な数に上る佐多の作品と国内外における研究の傾向をグラフにまとめて全体像を示し、その上で佐多が「中国改革开放後にはじめて中国に紹介された日本人女性作家」（159）であることの意義を述べている。

論文審査の先生方からは、「従来の佐多稲子に関する家父長制、男権社会、女性の目覚め、革命運動、戦争協力の批判などの面の先行研究を概観し、社会的弱者という新しい研究視点を立てた」（陳岩先生）、「欧米、日中の研究の新動向を踏まえ、新たな視野、知見、評価軸を提示した意義深い重要な研究となっている。新たな視点を佐多稲子研究に与えるだけではなく、近代の日中の歴史・文化の照射・再検討にとっても示唆的なものを包含している」（北田先生）、さらには「各期3作品ずつを取り上げた対象は、従来、等閑視されてきた作品が多く、その意味でも、佐多研究を進展させた功績は大きい」、「佐多は、戦時中、戦争協力をしたことを批判され、戦後には、それを自身のテーマとした。従来、この点は論議の的であったが、本論の戦時中の作品分析では、実は戦争反対を迂回して書いているという読みを提起していて、新見と認められる」（岩淵先生）など高い評価が下された。

各章で用いられた文化理論の一部についてはまだ考察の余地が残っていると見られるが、全体としては佐多文学を国際的な視点から検証し、新たな結論を導き出しており、日中における今後の佐多研究の促進に資すると考えられる。よって審査員一同、本論文は博士論文としての水準に達していると評価し博士の学位授与にふさわしいと判断した。

審査員（主査） 芳賀 浩一

審査員（副査） 北田 幸恵

審査員（副査） 岩淵 宏子（日本女子大学名誉教授）

審査員（副査） 陳 岩（大連外国語大学教授）